

令和 6 年 9 月 30 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H03971

研究課題名（和文）認知症ケアのアジア圏における国際的通用性を旨とした実践教育パッケージの開発

研究課題名（英文）Development of a practice education package for international acceptability in dementia care in Asia.

研究代表者

山崎 尚美（YAMASAKI, NAOMI）

四天王寺大学・看護学部・教授

研究者番号：10425093

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、5年間に於いて日本語版認知症ケアパッケージの作成と内容妥当性の検証、台湾（繁体語）版認知症ケアテキストの作成と内容妥当性の検証、韓国（ハングル語）版認知症ケアパッケージの作成と内容妥当性の検証を行った。各国の認知症ケアパッケージにおいては、ベトナム（ハノイ市）のNursinghome、台湾（雲林県斗六市）のGrouphome、韓国（光州市）の病院の看護職・介護職に対して認知症に対する認識や教育経験について半構成的面接またはフォーカスグループインタビューを実施した。各国での認知症ケアに対する教育は数時間程度の基礎教育のみであり、実習や演習といった形式での教育は少ないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、認知症ケアに関する最新の知識を系統的に確立でき、アクションリサーチといった準実験的研究の知見を得ることができる。また、社会背景や異文化の価値観、教育制度の違いから、認知症ケアの一般化こそはできないものその国々に合致したケア方法の確立は必要であり、今後認知症ケアが必要になると予測されているアジア諸国においてローカライズされた教育パッケージを作成し実証することは、アジア圏における国際通用性の構築になり社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Over a five-year period, this study developed a Japanese version of a dementia care package and verified its content validity, developed a Taiwanese (Traditional Chinese) version of a dementia care text and verified its content validity, and developed a Korean (Hangul) version of a dementia care package and verified its content validity. For each country's dementia care package, semi-constructive interviews or focus group interviews were conducted with nurses and caregivers at Nursinghome in Vietnam (Hanoi), Grouphome in Taiwan (Douliou City, Yunlin County) and hospitals in South Korea (Gwangju City) about their awareness of dementia and educational experiences. The study was conducted. It was found that education on dementia care in each country consisted of only a few hours of basic education, and that education in the form of practical training and exercises had not been attended.

研究分野：高齢者看護

キーワード：認知症ケア 実践教育パッケージ 国際通用性 アジア圏 ローカライズ

様式 C-19, F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の認知症者数は、462万人と推定され、厚生省の新オレンジプランをはじめ認知症カフェや認知症サポーター養成事業が各地で活発に実施されていた。また日本老年看護学会は「急性期病院において認知症高齢者を擁護する立場表明」の公表をしており、厚生労働省では「急性期病院における認知症対応力向上加算」が算定されるなど、わが国の認知症ケアは、高齢者ケア施設にとどまらず一般病院や急性期病院においても発展を遂げ、世界から注目を集めていた。そして、認知症ケアの質の保証を目指した日々の向上を支えるには、施設等だけでなく、現場で活躍できる認知症ケア人材を養成していくことが今後ますます重要だと考えられていた。

一方、他国の方が日本で認知症になると会話に使用する言語も母国語に戻っていき、大半が日本語を言語とする支援者の対応では本人のニーズの把握がしづらいなどのケアに限界があることが明らかにされていた。さらには、言語の問題だけでなく、他国の文化や価値観、社会背景の違いにより認知症者の BPSD に対応できていないといった認知症ケアの実践に対する課題が明らかになりつつあった。また、欧米や豪州・韓国・中国・台湾の高齢化に関する研究は現在も活発に実施されているが、殊にアジア圏では、認知症の概念や介護に対する価値観が約 50 年前の日本の状況と一致しており、今後はわが国だけの課題ではなくなることが懸念されていた。また、2017 年に WHO によると、G7 神戸保健大臣会合でも認知症について世界的な課題として討議しており、さらに世界保健機関は、国際的な課題だとして認知症の人に優しい社会づくりを各国に促す「行動計画案」を策定していた。このように、認知症施策は現在ではわが国だけの課題ではなく、世界的に取り組むべき課題として日本の施策提言や認知症ケアを参考にした「新しいケア方法の確立」やそのための実践教育のあり方や「認知症の啓発」が火急の課題となっていた。

2. 研究の目的

近年の日本における認知症者の増加に伴い、現場で活躍できる認知症ケア人材の養成、言語や文化、価値観等を背景とした日本における他国の認知症者への対応、認知症者への世界的取り組みが火急の課題となっている。本研究では、これらの課題に対し、わが国の認知症ケア人材養成教育パッケージおよび、異文化理解力の養成教育パッケージ、ベトナム・タイ・台湾・韓国などのアジア圏における認知症ケア人材の養成のための実践教育パッケージを開発することを目的とし、異文化理解力を備えた人材養成を可能にし、アジア圏での認知症ケア人材の養成に一助となると考えた。

3. 研究の方法

2019 年度・2020 年度 国内の認知症ケア人材養成のための実践教育パッケージの開発(日本語の教材作成)

1. 文献および先行研究から、概念枠組みの再構築、認知症ケアについて認知症の病態・診断・治療・症状への対応について事例を含めて情報収集した。
2. 先行研究や認知症ケアに関するテキストから導き出した教育内容に基づき骨子を抽出した。
3. 教育パッケージ案の作成:e ラーニング教材・シミュレーション研修教材(基盤研究 B:15H05097 の研究成果)を作成した。認知症ケアの当事者・家族・専門家・実践家・研究者間でディスカッションをし、シナリオ教材および研修内容を精選し、妥当性を確認した。
4. 教育教材のシナリオに基づき、病院版・施設版・在宅版の動画撮影を各班 2 本ずつ、合計 6 本の動画教材を作成した。

2021年度 国内の認知症ケア人材養成のための実践教育パッケージの開発(動画教材の作成)

1. 前年度までに抽出した教育内容を基盤として、日本語版の認知症ケア実践教育パッケージを執筆した。
2. 前年度に作成した教育教材のシナリオに基づき、病院版・施設版・在宅版の動画撮影を行い、実践教育教材の作成を行った。

2022年度 国内の認知症ケア人材養成のための実践教育パッケージの開発(内容妥当性の確認)

1. 前年度までに作成した「日本語版認知症ケア実践教育パッケージ」のテキストを用いて、国内(奈良県内)の病院の職員 49 人に対して内容妥当性の検証を行った。その際に研修会前・直後に「認知症看護の質評価指標短縮版」および「認知症に関する態度尺度」「認知症に関する知識尺度」など自記式質問紙調査を行いデータ収集した。
2. 国外ではベトナム(ハノイ市内)のナースィングホームで認知症ケアを実践している職員 15 人に対して、認知症のイメージ、認知症教育の実際、認知症ケアの課題についてインタビューを実施した。

2023年度 異文化理解力の養成のための実践教育パッケージの開発(内容妥当性の確認)

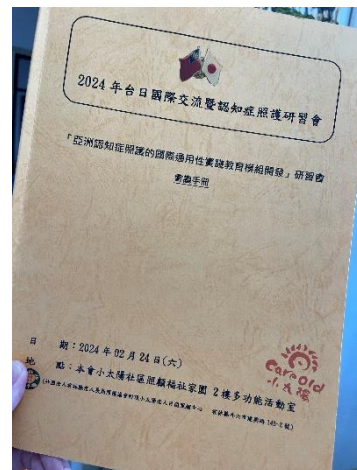
1. 前年度に続き、国内(大阪府と奈良県内)での病院看護師 45 人を対象としてリクルートし、作成した教育パッケージ案を用いて研修会を 1 回実施した。その際に研修会前・直後に「認知症看護の質評価指標短縮版」および「認知症に関する態度尺度」「認知症に関する知識尺度」など自記式質問紙調査を行いデータ収集した。



2. 「認知症ケア教育パッケージ」を現地の言語に翻訳し現地化(ローカライズ)した後に、国外において研修会を 4 回実施した。

台湾(雲林県)のデイサービス・グループホームの職員 37 人および韓国(ソウル市・光州市・釜山広域市内)の職員 33 人を対象に各 1 回の研修会を実施・評価した。評価については、前年度と同じ内容を研修会前・直に自記式質問紙調査により実施しデータ収集・分析した。また、研修前には認知症のイメージ、認知症教育の実際、認知症ケアの課題についてインタビューを実施した。

3. ベトナムにおいては、ナースィングホームの職員 15 人にインタビューのみ実施しており、タイについてはタイ赤十字大学との研究協力の調整中であり、今後も研究を継続していく。



4. 研究成果

(1) 日本の認知症ケアに関する教育教材内容の実態

2019 年度に、認知症ケア班を中心に国内の老年看護学・高齢者看護学に関するテキストおよび認知症に関する書籍の目次から認知症に関する構成要素として教授内容を抽出しカテゴリ化した。

その構成要素としては、①基礎編として、認知症ケアに関連した社会制度、認知症に対する検査や治療、中核症状・BPSD、認知症看護(ケア)の原理原則、認知症の人の生活援助技術、行動・心理症状の対応、ともに生きるパートナーの役割の理解、認知症の人を支える家族をサポートする組織と機能・役割、認知症の人を支える機関・職種、認知症看護(ケア)における意思決定支援のあり方や起こりやすい倫理的課題、認知症の人の End-of-Life Care に関する項目が抽出された。②応用編としては、2018 年度までに作成した先行研究のシナリオ事例集(病院班・施設班・在宅班)を参考に、特に行動・心理症状の対応の中でも病院編として点滴の自己抜去を繰り返す方への対応、ふらついてもひとりで動こうとする認知症高齢者への対応、入院後「家に帰りたい」と繰り返す方への対応、ケアを拒否する方への対応、大声でさげぶ認知症の方への対応、せん妄への対応、施設編として、自分の物が盗られたかと思っている認知症高齢者への対応、幻視のある認知症高齢者への対応、おむつ交換をされたくない認知症高齢者への対応、暴言や興奮状態がみられる認知症高齢者への対応、抑うつ傾向がみられる認知症高齢者への対応、物を収集する認知症高齢者への対応、在宅編として、訪問拒否のある(訪問を受け入れられない)高齢者への対応、ものとられ妄想のある高齢者への対応、帰宅願望のある(帰りたいという)高齢者への対応、入浴拒否のある(入浴したがる)高齢者への対応、食事を食べていないという高齢者への対応、徘徊のある(歩いている)高齢者への対応、異食のある高齢者への対応、嫉妬妄想のある高齢者への対応、終末期高齢者の胃瘻造設の説明時の対応についての事例を抽出した。③管理編として、認知症ケアにおける組織管理のあり方、リスク管理・リスクマネジメントのあり方、感染防止対策、効果的な人材育成、外国人労働者(EPA 看護師・特定技能実習生)受け入れ体制づくり、認知症ケアにおける IT・テクノロジーの活用について抽出した。

(2) 日本語版認知症ケア実践教育パッケージの作成

2020 年～2021 年度は、抽出した構成要素と作成したシナリオから目次を作成し、認知症看護認定看護師および老人看護専門看護師らに内容妥当性のスーパーバイズを行い、各執筆担当を決定した。また、行動・心理症状の対応の項目は、教材事例のイメージ化のために動画撮影した映像を URL および二次元コードに変換し自己学習できるテキストと e-learning 用のデバイスを作成し「日本語版認知症ケア実践教育パッケージ」とした。また、それぞれの教材には確認テストを設定し自己評価できるように作成した。

(3) ベトナム、タイ、韓国、台湾の認知症ケアおよび教育の実態把握

次いで、2021 年度には日本で働くベトナム・フィリピン・インドネシアの EPA 看護師および特定技能実習生ら 16 人対して自国の認知症の教育内容や認知症のイメージについて半構成的面接を行い、その結果をカテゴリ化した(図:研究参加者の概要)。

	母国	年齢	性別	職種	職場	看護教育歴
I7		30歳代	女性			専門学校3年
I9		20歳代	女性	EPA介護福祉士	介護老人福祉施設	大学5年
I10	インドネシア	30歳代	女性			専門学校3年
I13		30歳代	男性	EPA看護師	病院	専門学校・大学5年
I14		30歳代	男性			専門学校3年
F2		30歳代	女性		介護老人保健施設	
F6		30歳代	女性		病院	
F11	フィリピン	30歳代	女性	EPA介護福祉士	介護老人保健施設	大学4年
F12		30歳代	女性		介護老人福祉施設	
V1		20歳代	女性	EPA介護福祉士	介護老人福祉施設	
V3		30歳代	女性			
V4		20歳代	女性	EPA看護師	病院	大学4年
V5	ベトナム	30歳代	女性			
V15		20歳代	女性			
V16		20歳代	女性	技能実習生	介護老人福祉施設	専門学校2年
V17		20歳代	女性			

また、2022年度にハノイのナーシングホーム(ベトナム)、2023年度は雲林県のグループホーム(台湾)、光州市のケアミックス型の療養病院(韓国)の看護職・介護職33人にグループインタビューを行い、各国の認知症教育の実際と認知症に対するイメージについて情報収集した。タイ赤十字病院においてはカウンター

パートと研究参加者の調整を行ったが研究期間の終了に伴い実施には至らなかった。上記の結果から、認知症に関する教育は「受けていない、または4時間程度の講義のみ」であり、臨地での経験から体験的に学習していることが明らかになった。



(4) 各国の認知症ケアにローカライズし、認知症ケア実践教育パッケージの作成

上記(4)の結果から、カウンターパートの協力を得て、事例の一部を翻訳し、モデル的に台湾(繁体語)および韓国(ハングル語)の認知症ケア実践教育パッケージを作成した。

(5) 各国で認知症ケア実践教育パッケージを活用した研修会を実施・評価

2022年度から2023年度にかけて日本(大阪府・奈良県)、台湾(雲林県)、韓国(ソウル市・光州市・釜山市)の3か国でモデル的に作成した「認知症ケア実践教育パッケージ」の教材を活用した認知症ケア研修会を実施した。その際には、確認テストを研修会前後に実施し、研修会後には「属性」「認知症ケア自己評価尺度」「研修会の評価」に関する自記式質問紙調査を実施した。



結果として、国内の研修会の参加者は92名であり、平均年齢は42.6歳であった。認知症に関する確認テストおよび質問紙票でデータとして使用できるものは93名であり、確認テストの研修前の正解率は84.4%、研修後は88.2%であった。確認テストの前後の差に対しFridman検定を用い集計した結果、有意確率 $P < 1\%$ であり、1%の有意水準で有意差が見られた。受講者からは、少々簡単すぎると

いった意見もあったため初任者研修および看護学生へのe-learning教材としての活用は期待できるが経験によっては教材の再検討が必要であることが示唆された。

研究成果物として、日本語版認知症ケア実践教育パッケージの冊子体およびe-learning教材を作成、繁体語版認知症ケア実践テキスト、ハングル語版認知症ケア実践テキストの冊子体を作成した。

成果物:①日本語版の認知症ケア実践教育パッケージの冊子体(e-learning教材)の内容

URL : <https://learn.orange-cafe.net/course/view.php?id=4>

ユーザ名 : yamasaki パスワード : jVya8szPTAi53vc-

「著作権の処理が完了次第eラーニング教材として<https://learn.orange-cafe.net/>にて公開予定」 ②繁体語の認知症ケア実践教育パッケージの冊子体、③韓国語の認知症ケアの冊子体

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森上紀子, 山崎尚美
2. 発表標題 インドネシア人看護師の認知症高齢者のイメージと日本での認知症ケアにおける課題
3. 学会等名 第23回日本認知症ケア学会大会（広島市）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森上紀子, 山崎尚美
2. 発表標題 外国人看護師の認知症ケアに対する教育プログラムの開発
3. 学会等名 第27回日本老年看護学会学術集会（石川市）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森上紀子, 山崎尚美, 杉本多加子
2. 発表標題 日本の医療現場で認知症ケアに携わるベトナム人看護師の認知症のイメージの変化と課題
3. 学会等名 第26回日本老年看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森上紀子, 山崎尚美
2. 発表標題 日本の医療現場で認知症ケアに携わるフィリピン人看護師の認知症のイメージの変化と課題
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎尚美、藤野あゆみ、山本さやか、百瀬由美子
2. 発表標題 日本の認知症ケアパッケージ作成のための文献検討
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森上紀子、山崎尚美、杉本多加子
2. 発表標題 日本の医療現場で認知症ケアに携わるベトナム人看護師の認知症のイメージの変化と課題
3. 学会等名 日本老年看護学会第26回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎尚美、杉本多加子、島岡昌代
2. 発表標題 日本語版「認知症ケアに関する実践教育パッケージ」を教材に用いた研修会による学習効果の考察
3. 学会等名 日本看護科学学会第44回学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果物として、日本語版認知症ケア実践教育パッケージ、繁体語版認知症ケア実践テキスト、ハングル語版認知症ケア実践テキストの冊子体および教育ディバイスを作成した。

「eラーニング教材として<https://learn.orange-cafe.net/>にて公開」
(著作権の処理が完了次第、公開予定)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤野 あゆみ (FUJINO AUMI) (00433227)	愛知県立大学・看護学部・教授 (23901)	
研究分担者	百瀬 由美子 (MOMOSE YUMIKO) (20262735)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	
研究分担者	柳澤 理子 (YANAGISAWA SATOKO) (30310618)	愛知県立大学・看護学部・教授 (23901)	
研究分担者	天木 伸子 (AMAKI NOBUKO) (40582581)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・准教授 (33941)	
研究分担者	山本 さやか (YAMAMOTO SAYAKA) (50760344)	日本福祉大学・看護学部・講師 (33918)	
研究分担者	宮崎 誠 (MIYAZAKI MAKOTO) (60613065)	帝京大学・理工学部・助教 (32643)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	杉本 多加子 (SUGIMOTO TAKAKO) (40549721)	四天王寺大学・看護学部・講師 (34420)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐藤 晶子 (SATO MASAKO)		
研究協力者	森上 紀子 (MORIGAMI NORIKO)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ベトナム	Vietnam Nursing Association	Can Tho Medical College	テュンデュックNursing home	
タイ	タイ赤十字大学			
韓国	大韓老人療養病院協会			
オーストラリア	Australia(AIPEACS)			
その他の国・地域(台湾)	社團法人雲林縣老人長期照護協會 附設小太陽老人日間照顧中心			